

桑野智章

（平成二十六年八月号）

日没に闇の広がるを見ておりぬ首筋に闇の近づく気配

夜の駅に赤錆びた線路見つめおり線路は闇に消えて行くのみ

地球儀は優しく抱いて運ぶものクロネコヤマトの帽子を被り

彫像の如く立ちいる警察官の半径二メートルに人は入らず

青空の今日は圏外、目覚しに起され鉄のかたまりに乗る

太平洋を小型ボートで渡るような危うさの中間議は終る



●作者の言葉

短歌を始めて6年になった。

しかも50歳を過ぎて突然始

た。日曜の朝、偶然「NHK

短歌」を見た時、講師の先生

が言われた「表現することは

生きてる証」に感動したから

である。そして3年が過ぎて

「心の花」に入会した。右も

左も分からず始めて、また3

年が過ぎた。結局何も分かってないが、毎日が楽しくなったのは事実である。歌のテーマは「サラリーマンの一日」である。毎日の通勤途中で見たものや、職場で起きたことなどを歌にしている。谷岡先生、年間選者賞どうも有難うございました。

●選者の言葉

去年7月号からの一年間に私が特選に選んだ作者の一覧を作ってみた。毎月4人で延べ48人。圧倒的に女性が多いことに改めて気が付く。それは多分わたしの選歌欄だけではないだろう。そうした中で今後への期待も込めて、桑野智章の作品を年間選者賞に押し。桑野のこの作品の文体にはやや荒削りな部分が残るが、内容も含めてそうした引つ掛かりのような感覚を、つまり安易に「短歌的文体」と言われるものに親和しない部分を、逆に買いたいと思う。「闇」や「圏外」に象徴される、かすかなアウトサイダーの気配、社会からの微妙な疎外感が、一連の持ち味だろう。例えばポールランド映画「灰とダイヤモンド」の主人公チエツクを思わせると言ったら褒め過ぎか。